



記者発表資料	
令和6年10月18日	
担当課 (担当)	文化交流課 中村・城市
電話	30-8021 (内線 2818)

第49回（令和6年度）鳥取市文化賞受賞者および贈呈式について

昭和51年から、鳥取市の芸術・文化の振興に顕著な業績を上げた個人または団体に対し、文化賞を贈呈しています。

このたび、5名の文化賞受賞者が決定しましたので、受賞者および贈呈式についてお知らせします。

1 鳥取市文化賞の種類

(1) 文化賞

- ア 美術・音楽・芸能・文芸・学術等の発展に貢献し、特に最近の活動が顕著であったもの
- イ その他とくに著しい業績があったと認められるもの

(2) 文化賞特別功績賞（平成25年～）

主な活動拠点が鳥取県外にあって、その活動が全国的に高く評価され、本市の美術・音楽・芸能・文芸・学術等の発展に大きな功績があると認められるもの

(3) 文化賞奨励新人賞（令和4年度～）

- ア 美術・音楽・芸能・文芸・学術等において、特に最近の活動が顕著であり、将来活躍が期待されるもの
- イ 年齢が概ね40歳以下であるもの

2 鳥取市文化賞の受賞者

【文化賞】

- | | | |
|---|-----------------------|--------|
| 1 | 井上 聖子 (いのうえ きよこ) 氏 | 〔書道〕 |
| 2 | 白岡 文江 (しらおか ふみえ) 氏 | 〔日本画〕 |
| 3 | 中原 秀樹 (なかはら ひでき) 氏 | 〔放送〕 |
| 4 | 松本 健一 (まつもと けんいち) 氏 | 〔文化活動〕 |
| 5 | 椋 誠一郎 (むくのき せいいちろう) 氏 | 〔俳句〕 |

※受賞者の詳細は別紙資料のとおり

3 贈呈式

日 時：令和6年11月3日（日・文化の日） 午前9時30分～10時30分
場 所：鳥取市役所麒麟 Square 2階多目的室1

4 その他

- (1) 昭和51年から第48回までに、133名と6団体が受賞されています。
- (2) 受賞者のあいさつ、選考経過報告につきましては、贈呈式当日の11月3日に行います。

第49回 鳥取市文化賞受賞者

いのうえ きよこ
井上 聖子〔書道〕



【受賞理由】

現在、全国組織の一先会鳥取支局の代表として活動し、作品は日展入選6回をはじめ、日本書芸院展で大賞を2年連続受賞するなどの実力は高く評価されている。

鳥取では鳥取県展無鑑査として、全国でも読売書法展において、読売新聞社賞を受賞し、読売書法会理事や日本書学研究会一先会総務理事を務めるなど、重責を担っている。

作品は、美しさ、優雅さを感じさせる「かな書道」であり、行の流れ、墨色の変化、粗密や余白の使い方を熟考されて書き込まれた素晴らしい作品である。

【経歴】

- 昭和44年 武蔵野女子大学日本文学科卒業
- 昭和47年 都宮彬聖先生に師事（柳泉会に入会）
- 昭和57年 山中孤舟先生に師事（東泉会に入会）
- 平成27年 横山煌平先生に師事（日本書学研究会一先会に入会）
- 〃 日本書学連盟一先会鳥取支局長に就任
- 平成28年 鳥取書道連盟常任理事に就任
- 平成30年 日本書学研究会一先会総務理事に就任
- 令和4年 読売書法会理事に就任

【受賞歴】

- 平成28、
- 29年 日本書芸院展大賞
- 令和2年 鳥取県展賞
- 令和3年 読売書法展読売新聞社賞
- 令和4年 鳥取県展賞
- 令和5年 鳥取県展奨励賞

【主な活動】

- 平成28年～ 年一回（5月）書学研究会一先会鳥取支局研究会開催
- 平成29年～ 改組日展第4回・5回・6回・8回・9回・10回入選

『書展出品』

市展（無鑑査）、県展（無鑑査）、日本語研究会一先会展（神戸）、鳥取書道代表10人展、日本書芸院展、読売書法展、女流展、鳥取書道連盟展、鳥取県書道連合会展、日展 等

【作品に対する思い】

かなの美しさは、連綿の美しさ、墨色の美しさ、そして散らしの美しさです。そしてその三つが調和することによって、より一層の美しさが生きてきます。その表現技法を創作に向けての指針として学びたいと思っています。

【活動に対する思い】

デジタル化が進み、文字を書くことが少なくなってきた昨今、一人でも多くの方が書道に興味を持ち、書道展に足を運んでくださることを願いながら活動しています。

第49回 鳥取市文化賞受賞者

しらおか ふみえ
白岡 文江〔日本画〕



【受賞理由】

多摩美術日本画科卒業後、鳥取に移住し、それまでなじみが薄かった日本画を鳥取家政高校で生徒に指導して、鳥取市展賞、県展賞、無監査などの多数の受賞に導く。

現在は鳥取市、米子市でグループ鳥「白岡文江日本画教室」を主宰して指導に励み、鳥取市45回、米子市35回、毎年連続して「白岡文江日本画教室」の生徒の作品展を鳥取市と米子市で開催するなど、市民への普及活動に尽力されている。

作品は、凛とした写実と心象にあり、前半は「鳥取の野鳥」をモチーフにし、後半は「時を旅する」として海外の20か国の歴史や風土をモチーフに描き、鳥取県をはじめ全国各地の団体や個人に收藏されている。

長年にわたり、描くことの楽しみや生きがいを見出させてくれる指導を続け、日本画の魅力を市民に普及させた功績は大きい。

【経歴】

- 出身 静岡県沼津市出身。
- 昭和40年～ 多摩美術大学美術学部日本画科卒業
在学中に奥村土牛先生、森田曠平先生に師事。
多摩美術大学、イエール大学作品交換に選抜される。
多摩美卒業後、出身地の沼津精華高校で美術講師。
沼津市展賞受賞、三島市展賞受賞。
- 昭和42年～ 鳥取で「日本画制作集団」結成、指導にあたる。
個展、グループ展は、ビーナス画廊1回、鳥取美術画廊10回、鳥取大丸美術画廊2回、米子高島屋美術サロン4回、郷土選抜美術展に10回出展、ギャラリー槐1回、スペースサカオ1回、ギャラリー栄光舎で3回個展。
日仏美術展に選抜され、パリ／グラン・パレに「猫のいる風景」を展示。
NHK美術交流に選抜、ハンガリービエンナーレ出展、出展作品「きりん獅子」をハンガリー日本大使館に寄贈。
- 昭和42年
～52年 鳥取家政高校美術講師。
- 昭和42年～ 鳥取で「日本画制作集団」結成、一般希望者の指導にあたる。
- 昭和53年～ 「日本画制作集団」を改称し、“グループ鳥”を新しく結成、主宰して日本画を指導しつつ、フリーで作家活動する。“グループ鳥”鳥取展は5年ごとに記念展を拡大版として開催。
- 昭和63年～ NHK文化センター「鳥取教室」、「米子教室」日本画講師。
- 平成15年～ 毎年“グループ鳥”鳥取教室、米子教室展を開催。
- 平成19年
～24年 鳥取敬愛高校講師。
- 令和2年 川上奨励賞受賞。
- 令和4年 “グループ鳥”白岡文江日本画教室46回（毎年）展を開催、米子教室は30回展（米子も30回毎年連続）。

【受賞歴】

- ・多摩美術大学時代、イエール大学との作品選抜
- ・沼津市展賞、三島市展賞受賞
- ・郷土選抜展に選抜10回
- ・日仏美術選抜、「猫のいる風景」
- ・ハンガリービエンナーレ選抜、「きりん獅子」
- ・川上奨励賞受賞

【芸歴・著作暦等】

昭和42年鳥取に移住して「鳥取家政高校」の美術講師を勤めることになり、教えている生徒がいきなり市展賞、県展賞を受賞する。

昭和42年、一方、市民から日本画岩絵の具の指導を求められ、「日本画制作集団」を結成し、鳥取では馴染みの少ない「岩絵の具」を東京から取り寄せる。途中で白岡文江日本画画教室「グループ鳥」に改称し、また30年前からは米子教室も始まる。

鳥取、米子教室の作品展は毎年行い、5年毎は記念展としている。

一方、地元での個展やグループ展は、ビーナス画廊1回、鳥取美術画廊10回、鳥取大丸2回、米子高島屋美術サロン4回、スペースサカオ1回、ギャラリー槐1回、ギャラリー栄光舎3回、郷土選抜展は連続10回の開催に出展、作品はサムホールから制作～100号など約350点の作品制作。海外の作品展は日仏現代日美術選抜パリ／グランパレ展、NHK文化交流選抜で「グループ鳥」の生徒10人を連れハンガリービエンナーレに出展し、展示後ハンガリー日本大使館に「きりん獅子」80号を寄贈している。

【主な活動】

昭和42年に鳥取への移住後は、

- (1) 高校生の美術指導にあたり、「鳥取家政高校」「岩美高校」「敬愛高校」で講師として指導。
- (2) 一方、市民の方にも日本画（岩絵の具）の手ほどきをし、初期は「日本画制作集団」とし、その後、「白岡文江日本画画教室、グループ鳥」に改称し、今に至っている。
- (3) また、鳥取の画廊やギャラリーなどで、個展、グループ展も30数回を数え、多くの人に見ていただくなど、活動している。

【作品に対する思い】

自分の作風は、岩絵具の日本画で「ストーリー性のある心象風景」とし、初期から今まで変化しながら楽しく描き、これまで約350数点の日本画を描いている。

- (1) 鳥取の「野花を春から秋と追いかけて」自分のテーマとしている。
- (2) 我が家で4匹の猫を飼い、4匹それぞれの性格を見つけ、今も日本画にしている。
- (3) また、海外に興味を持ち、ソウル、タイペイ、バンコク、チェンマイ、上海、張家港、北京、大連、瀋陽、パリ、ウィーン、ベネチア、エジプト、トルコ、ポンペイ、ナポリ、ハンガリーなどに出かけ「チェンマイの民族舞踊」、「ベネチアカーニバル」、「エジプトの思い出」、などとし「時を旅する」としてシリーズにしている。
- (4) 今は孫の姿をストーリーにして残している。

【活動に対する思い】

- (1) 鳥取家政高校での「女子高生」との出会いや、「グループ鳥」での日本画に興味のある人との出会など、これまで数多の老若男女の方と接し、指導者を超えて、人生を語るなど、お一人お一人と数多く活動の思い出がある。
また、「グループ鳥」の中には県展賞、市展賞、無鑑査の方もおられ、彼らの中には自ら作品展や、画集制作など、単に絵を描くだけでなく、多々指導している。
- (2) ハンガリー出展では「グループ鳥」のメンバーの中、約10名が参加し、出展をしている。
- (3) 「グループ鳥」作品展では、鳥取青少年自立支援ホーム「鳥取フレンド」への支援のため、チャリティを実施し、売上の中から寄付をしている。
- (4) 「グループ鳥」では皆が絵を描く楽しみで、奇を衒う事のない作風となっている。

第49回 鳥取市文化賞受賞者

なかはら ひでき
中原 秀樹〔放送〕



【受賞理由】

鳥取市に根ざしたコミュニティFMの社長でありつつ、メインのパーソナリティーとして、鳥取の魅力を豊かに発掘し発信されている。語り口は非常に滑らかでテンポ良く、しかし、表面的になるのではなく、鳥取の人、出来事、物の魅力を自分の言葉で丁寧に楽しく語られる。

また、パーソナリティーとしての語りだけではなく、放送局の番組編成においても、鳥取の魅力を発信する姿勢は一貫している。

鳥取の文化を作り上げ、発展させる上で、放送文化は極めて重要な役割を果たしており、鳥取文化を盛り上げるうえで果たされたこれまでの功績は顕著である。

【経歴】

- 平成17年4月～ 株式会社FM鳥取 局長就任
- 平成29年3月～ 株式会社FM鳥取 代表取締役社長就任
- 令和3年6月～ 一般社団法人日本コミュニティ放送協会
理事及び同中国地区協議会会長就任
- 令和5年6月～ 一般社団法人日本コミュニティ放送協会
副代表理事就任

【主な活動】

- 平成元年4月 大学入学と同時にラジオ関西でのADとして採用
ラジオ放送業界での活動を開始。
- 平成元年6月～ FM多局化時代の波に乗り、大阪、神戸、京都、名古屋の第二FM局開局に伴い、フリーランススタッフとして各FM局の数多くの番組制作を担当。合わせて、大阪、神戸のAM深夜ラジオのスタッフとしても従事。
さらに番組制作だけでなく番組出演なども行う。
- 平成12年6月 大阪より番組配信を行っていた岡山と倉敷の2局のコミュニティ放送局にて、同地区初の県南コミュニティFM同時2局ネット生ワイド番組を企画。放送開始にあわせ岡山へ移住。
この番組の成功によりコミュニティ放送の可能性に気付く。その後、地元密着型のコミュニティ放送の原型をプランニング。
計画を実施できる地域をリサーチ開始。
- 平成17年4月 株式会社FM鳥取の開局にあわせ鳥取へ移住。
局長就任と同時に、編成・制作・営業等、コミュニティ放送運営全般に携わる。

【作品に対する思い】

FM鳥取の開局3年前より岡山から鳥取へ毎週の様に通いながら、鳥取大学、鳥取環境大学のラジオ番組制作プロジェクトの学生メンバー番組制作のノウハウを提供しつつ、鳥取という地で開局させる地域密着ラジオ局のグランドデザインをあれこれと構想していたのは良い思い出です。

鳥取へ通うようになって、当時からよく耳にした「鳥取には何も無い」という言葉。私にとっては、それは全く悪いイメージではなく、むしろ伸び代しかない天国の様な場所を言い表しているように思えました。望むものが無いからこそ、自ら産み出して皆に喜んで頂ける・・・そんな地域の放送局を目指して局作りを目指しました。

【活動に対する思い】

コミュニティ放送局は、現在国内に340を超える局が各地で活動していますが、何れの局も広告費が減少する中、財政的に厳しいのが現状です。そんな逆風の環境の中でも鳥取県東部の皆様に、地域の情報インフラとしてしっかり局を残すべく、これまで30年以上に渡って培ってきた番組制作ノウハウを余すことなく投入。聴取率向上を目指した安定運営を行ってきました。

これにより、平時は地域の文化芸術の発展に寄与する番組を数多く提供。

また、地域で頑張る人と人を繋ぐハブ機能としての役割も担いながら、地域を盛り上げる番組作りにも注力しています。さらに最近では、姉妹都市・釧路と女相撲大会を通じた民間交流を促進する番組なども実施。

災害時などの有事の際にも、しっかりと市民に対して情報提供を行うことが出来る放送体制とネットワーク作りなどにも力を入れています。そして、今後は、文化のインフラ、心のインフラとしての役割をさらに強化していきながら、今後も、ここ鳥取で最も必要とされる街の放送局であり続けるよう務めています。

第49回 鳥取市文化賞受賞者

まつもと けんいち
松本 健一〔文化活動（画廊経営）〕



【受賞理由】

鳥取という地域では、継続的に美術作家を紹介し続ける公共機関があまりなく、栄光舎のような画廊の存在は大変貴重である。

その経営者として長く活動され、地元の作家と、県外の全国区の作家をバランスよく紹介し、良いものは良いという視点で、使命感をもって活動されている。絵画から工芸まで様々なジャンルの作家を育ててきた。

また、「あざみ展」「ざくろ展」「百合展」等、ユニークな企画展も地元作家を含めて行っており、多くの美術ファンに支持された。

日本全国から力のある作家を選び出し、地元作家についても有望株に焦点を当て、個展やグループ展という形で紹介するなど、作家の育成および市民への文化芸術の普及活動に日夜努力されており、鳥取市の文化向上に貢献している。

【経歴】

昭和43年4月 劇団青俳劇研究所入所
昭和45年3月 劇団青俳劇研究所修了
昭和45年4月 劇団青俳入団
昭和55年3月 劇団青俳退団
昭和58年4月 ギャラリー栄光舎開設
昭和58年6月～
平成18年12月 鳥取演劇集団在席

【主な活動】

ギャラリー開設から41年間に陶芸・絵画・工芸の作品展を200本企画開催する。作品集の企画編集も手掛ける。

『主な作品集』

平成23年 絵緋、安陪寿恵作品集
平成30年 山根文子作品集
令和元年 中尾広太郎作品集

【作品に対する思い】

個性的である事を重要視し、独創性の強い作品を手掛けられる作家の作品展を企画開催した。

【活動に対する思い】

実力はあるが、あまり表に出ていない作家にスポットを当てた作品展開催を心掛けてきた。作家の新境地を引き出す事は出来ないものかと、作品展の主題、テーマを作家と話し合っ、基本的に新作のみの展覧会を手掛けてきた。

第49回 鳥取市文化賞受賞者

むくのき せいいちろう
椋 誠一郎〔俳句〕



【受賞理由】

故稲畑汀子（高浜虚子の孫）、次いで稲畑廣太郎に師事し、「ホトトギス」に抛りながら、作句を続けて30年余。

身の自然や家族を素材にしなが、平明で思いの深い作風である。

現在、日本伝統俳句協会評議員、同山陰協議会副会長、鳥取県俳句協会理事などの重役を務めるとともに、「鳥取ホトトギス会」「ふれあい俳句教室」「むつみ句会」など鳥取市で俳句指導を行い、俳句の普及、発展に尽力している。

今後の鳥取の俳句界の強力な指導者として期待は大きい。

【経歴】

平成7年 俳誌「ホトトギス」入会・投句
「山陰」（日本伝統俳句協会山陰協議会機関紙）投句
平成8年 （公社）日本伝統俳句協会会員となる
平成13年 俳句結社「円虹」入会
平成14年 「野分会」（戦後生まれのホトトギス若手俳人の会）入会
平成16年 ホトトギス同人に推挙さる
平成17年 日本伝統俳句協会中国支部事務局長に就任～令和3年まで
平成24年
・令和2年 鳥取県俳句協会会長
現在 （公社）日本伝統俳句協会評議員
日本伝統俳句協会山陰協議会副会長
鳥取県俳句協会理事
日本現代詩歌文学館評議員
鳥取文芸協会理事

【受賞歴】

平成17年 芦屋国際俳句・虚子奨励賞受賞
平成19年 日本伝統俳句協会・協会賞受賞
平成20年 日本伝統俳句協会全国大会大賞受賞
平成21年 日本伝統俳句協会全国大会高知市長賞受賞

【主な活動】

平成13年 大正時代から続く「鳥取ホトトギス会」主宰・選者に就任
～現在に至る
平成14年 湯梨浜町「あやめ句会」選者に就任～現在に至る
平成17年 生涯学習センター「ふれあい俳句教室」代表、講師就任
（令和2年椋則子に代表交代）
平成19年 倉吉「打吹句会」選者に就任～現在に至る
平成25年 新日本海新聞「日本海俳壇」選者に就任～現在に至る
平成30年 鳥取市男女共同参画センター「むつみ句会」の講師就任
～現在に至る
平成31年 ベトナム・ホーチミンにて「日越俳句交流会」に参加
令和6年 ねんりんピック鳥取俳句交流大会実行副委員長

【作品に対する思い】

俳句は一読して、読者にストレートに句意が伝わるものでなくてはならないと思っています。

ホトトギスの草創期から伝統俳句を守り、育てた高濱虚子の主張した「平明にして余韻ある句」を詠むことを目標にして詠み続けているところです。

ここでいう「平明」とは、見聞き感動したことがらを普段使用している日常語で素直に表現することを言います。

表現したい内容が複雑であっても、それをことさら晦渋な語句や言い回しで表現するのではなく、出来る限り言葉を省略し、平易な言葉を用いて言いたいことを詠む努力をしています。

また、人間も自然の一部という意識で、自然に溶け込み自然を詠むことを心掛けています。

四時の移ろいを感じ取って詠んでゆく、まさに自分の生きた証として、また自分自身の記録として詠んでゆきたい、そんな気持ちで俳句に取り組んでいます。

【活動に対する思い】

公民館俳句や生涯学習の講座などに参加を希望される方たちは「俳句は小中学校時代、授業で作った程度で実作の経験はないが、俳句への興味はあった」と、異口同音にこのように話されます。

俳句に接する機会に恵まれなかつただけ、とも。こうした潜在的な“俳句愛好家”の多くは、句の道へ一步を踏み出すきっかけがないばかりに、俳句からますます遠ざかって行ったのだと思います。

そこで私も微力ながら、そうした潜在的な“俳句愛好家”の一步を踏み出すきっかけ、背中を押す手助けが出来たらと考えています。

「俳句によって私は（精神的に）救われた」という高齢俳人の声をこれまで何度となく耳にしてきました。

これは大変なことです。わずか17音という短詩に、そのような底知れぬ力が隠されていることに改めて驚かされます。

公民館の俳句教室などで「俳句を続けてきて良かった」という声をもっともっとたくさん聞こえてくるように講師として努めて参りたいと思っています。